

## ハワイ滞在中の長者丸乗組員たち

笠原 潔\*

### Cast Away Japanese Sailors in 1839 – 1840 Hawaii

Kiyoshi KASAHARA

#### ABSTRACT

In June, 1839, a wrecked Japanese trade ship, named Choujamaru, was saved by an American whale ship in the Pacific Ocean. Seven survivors were transferred to Hawaii, but there, the captain was dead. Six sailors lived there till 1840, then, returned to Japan in 1843. Their lives in Hawaii were recorded, both on Japanese side (“*Bandan*”, 1849, “*Tokei-monogatari*”, 1849, and other literatures), and American side (collected in the 10th chapter of Mary Charlotte Alexander’s “*Dr. Baldwin of Lahaina*”, 1953, Berkeley, Cal.: Stanford University Press). Surprisingly enough, these literatures on both sides coincide well about the descriptions of the sailors’ lives in Japan before the accident and their lives in Hawaii after the accident. Several descriptions supply the lack of the Japanese or American material. So, I translated the 10th chapter of the Alexander’s book into Japanese, and annotate it with Japanese literatures.

#### 要旨

1839 (天保十年) 年6月、長者丸という名の難破船が太平洋でアメリカの捕鯨船に救助された。救助された7人はハワイに送られたが、そこで船頭の平四郎が死亡した。生き残った6人の乗組員はハワイで1840年まで生活した後、1843年に日本に帰還した。ハワイでの彼らの生活は、日本側 (『蕃談』『時規物語』、その他)・アメリカ側 (メアリー・シャルロット・アレクサンダーの『ラハイナのボールドウィン博士』第10章に所収) に記されている。驚いたことに、これらの資料は遭難前の乗組員たちの日本での生活や遭難後のハワイでの生活の記述において、非常によく一致している。いくつかの記述は、双方の欠を補うものである。そこで、アレクサンダーの書の第10章を日本語に訳して、これに日本側の資料に基づき、注を付けることにした。

江戸時代の間、日本に西洋音楽ないしは西洋音楽情報が伝わってくるには、長崎の出島を経由しての他にもう一つのルートがあった。それは、漂流民たちを通してであった。

乗っていた船が難破し、異国に漂着した漂流民のうち、無事日本に帰国できた者は、帰還後、異国での見聞を様々に語った。そうした中に、彼らが漂着先で接した西洋音楽ないしは西洋音楽に関する情報があった。こうして、日本は彼らの口を通して、西洋の音楽や西洋音楽情報に接するところとなったのである。

天保九 (1838) 年に遭難し、ハワイ、ペテロパヴロフスク、オホーツク、シトカ (現、アラスカ州) を経て、天保十四 (1843) 年に帰還した越中・富山の長者丸乗組員たちの場合もそうである。彼らが日本に

伝えた西洋音楽やハワイの民族音楽に関する情報に関しては、放送大学印刷教材『西洋音楽の諸問題 (’05)』 (放送大学教育振興会、2005年) の306-310頁で紹介しておいた。また、彼らが現地で覚えてきたとおぼしきロシア歌曲については、『西洋音楽の諸問題 (’05)』の第13回の放送授業の中で紹介しておいた。

ところで、こうした研究を進める場合、重要なのは可能な限り正確な伝記的情報を把握することである。しかし、従来の漂流記研究の場合、主として日本側の資料に基づいて進められてきたため、依拠する情報が漂流民自身の口から語られるものに偏りがちであった。

それに対して、長者丸乗組員の場合、ハワイで彼らの援助にあたったアメリカ側の資料にハワイ滞在中の

\* 放送大学教授 (「人間の探究」専攻)  
2008年10月永眠。



図1 ボールドウィン博士(アレクサンダーの書より)

彼らの動静に関する記録が残されている。それらは、マウイ島のラハイナで彼らの面倒を見たアメリカ人宣教師ドワイト・ボールドウィン(図1。日本側資料には、「ミス、テ、バラオイナン」の名前で、もしくは「ムオマイのミヒナレ」 [=ミッシヨナリー=宣教師]の肩書きで登場する)の伝記『ラハイナのボールドウィン博士』Dr. Baldwin of Lahaina (カリフォルニア州、パークレイ、1953年)の第10章に収められている。著者のメアリー・シャルロツテ・アレクサンダー Mary Charlotte Alexanderは、巻末の謝辞の中でボールドウィンのことを「高祖父」great-great-grand fatherと呼んでいるから(Alexander: 349)、ボールドウィンの玄孫(やしやご)にあたる人物なのであろう。一族に伝わった手紙や日記などの資料を駆使して書かれたのがこの伝記である。

この書を読んで驚くのは、記された内容が長者丸乗組員たちに関する日本側資料と非常によく一致している点である。例えば、漂流民の一人次郎吉(図2)が絵に巧みであったこと、非常な力持ちであったこと、仲間たちから幼名の栄次郎ないしは栄次の愛称で呼ばれたこと、ボールドウィンとの間で数の「位取り」に関する問答がなされたことなどは、脚注に示したように、日本側の資料にも記されている。そのことは、本書に記されていて日本側資料に欠けている情報——例えば、ハワイで客死した船頭の平四郎に5人の子供があったこと、など——にも高い信憑性があることを示している。そうしたところから、日本側資料の欠を補うものとして、この章を訳出し、日本側資料との異同を脚注に記した次第である。もちろん、ボールドウィンが漂流民から聞き取った情報の中には誤解もある。そうした点はなるべく正すよう、これも脚注を施しておいた。

長者丸乗組員たちが日本に帰還した後、日本で作成された資料には、幕府の儒者古賀謹一郎が編集した



図2 次郎吉(『時規物語』より)

『蕃談』(嘉永二〔1849〕年跋。池田(編)1968: 241-302)と加賀藩の遠藤高(たかのり)が中心となって編集した『時規(とけい)物語』(嘉永二年跋。池田(編)1968: 5-233)がある。その他に、「撒土微私(さんどびし)漂流記」(国立公文書館内閣文庫蔵。高瀬1974: 211-216)と「漂流人次郎吉物語」(高岡市立中央図書館蔵。高瀬1974: 218-245)がある。「撒土微私漂流記」の成立経緯は不明であるが、「漂流人次郎吉物語」は嘉永元(1848)年に帰郷した後の次郎吉の談話を記したものである。これらの漂流記からの引用を脚注に記すにあたっては、『蕃談』と『時規物語』の場合は池田(編)1968の頁番号を、「撒土微私漂流記」と「漂流人次郎吉物語」の場合は高瀬1974の頁番号をもって示すことにした。また、引用にあたっては、送り仮名を補ったり、送り仮名に濁点を施したほか、変体仮名を普通の仮名に改めた個所がある。JIS第2水準に入っていない漢字は、ほぼ同義の他の漢字に置き換えた(特に『蕃談』の場合、こうした措置を取った個所が多い)。いずれにせよ、引用にあたっては出典の頁番号を示しておいたので、原文表記に関しては、原典を参照されたい。

なお、ボールドウィンの書いた文章は、決して意味が取りやすい文ではない。そのため、思いも掛けない誤訳があるかもしれない。不審な個所には原文を記しておいたので、識者の教示を待ちたい。

ラハイナの日本人漂流民たち<sup>1)</sup>  
メアリー・シャルロツテ・アレクサンダー<sup>2)</sup>著  
笠原 潔訳注

ボールドウィン博士<sup>3)</sup>は語る<sup>4)</sup>:「〔1839年10月18日〕、外出から戻ってきた時、家の中やドアのあたりに人だかりしていることに私は気付いた。人々が何で集まっているのか分からないまま家に入った時、私は三人の男が見るからにつつまし気humbleな様子で目の前に座っているのを見た。中国人に似ているが、もっと色

が黒い。お辞儀は一層うやうやしく、各自の両手は膝を通り越して、膝下にまで達した。このお辞儀は何度も繰り返された。「どなたですか、このお客様方は？」と尋ねた私は、直ちに、その場にいた捕鯨船ジェームズ・ローパーJames Loper号<sup>5)</sup>のキャスカート船長Capt. Cathcart<sup>6)</sup>から、船長が6月6日<sup>7)</sup>に150トンか200トンぐらいの大型の難破船<sup>8)</sup>から救助した7人の日本人のうちの3人であることを教えられた。残りの4人は他の3隻の捕鯨船に移され<sup>9)</sup>、オアフ島に送り届けられる手はずになっていた。キャスカート船長は、親切にも4ヶ月半の間彼らの面倒を見、必要とするものを与え、今や当地で彼らと別れようとしていたのである<sup>10)</sup>。

「ジェームズ・ローパー号がこの不運な難破船と遭遇した時に付近にいたオーベッド・ミッチェルObed Mitchell号<sup>11)</sup>の航海日誌をレイ船長Capt. Rayの好意により見せてもらった結果、彼らが遭遇した場所がよりはっきりと分かった。日本の本州the Island of Japanとサンドイッチ[ハワイ]諸島の間あたりであった<sup>12)</sup>。持ち運び可能な所有物全てが捕鯨船に移された後、日本船には火が掛けられた<sup>13)</sup>。遭難者たちは単に食事<sup>14)</sup>や必要な衣服<sup>15)</sup>が与えられたばかりでなく、私を知る限りでは彼らが保有していた全ての持ち運び可能な持ち物とともに当地に送り届けられたが、それはひとえにキャスカート船長の親切心と海の男の間にしばしば見られる度量の広さによるものといわざるを得ない。その中には、長方形をしたかなりの量の金銀の貨幣もあった<sup>16)</sup>。それらは、難破船から脱出する時、キャスカート船長の管理に委ねられたが、補償に充てるために預かった金は一文もなかった<sup>17)</sup>。

「私は日本人に会ったことがなかった。その場にいた大部分の人間にとっても同様だったであろう。彼らの見かけは、もちろん決して好奇心を呼び覚ますものではない。ただ、私たちは、どんな奇禍が彼らに降りかかったのか知りたかったのである。また、事実上ほかの全ての国民が閉め出されている彼らの国について、なにがしかのを知りたかった。私は彼らに英語でしゃべりかけてみた。しかし彼らは、4ヶ月半の間捕鯨船に乗っていたにもかかわらず、ほんのわずかし英語を習い覚えていなかった。他の者はハワイ語でしゃべりかけた。彼らがハワイ語を耳にするのはもちろん初めてであった。他の者は、そうすれば話が通じるかのように大声で話し掛けた。そのうち、中国人と日本人は同じ文字を使うことが分かったので、我々は英語をしゃべる一人の中国人の助けを借りることにした。彼は、聾者と啞者の対話のように、深い沈黙のうちに日本人たちと会話を交わした。彼は我々の質問を記し、それを日本人の中の最年長者が、時にへどもどしながらかじりと読み、それから自分の答えを書いた。両国民の間で大半の文字は共通であったが、それぞれ固有の文字もあった。それでも彼らは、相手の言語に固有な文字のいくつかも理解したようであった。日本語と中国語は、ヘブライ語と同じく、書くに

せよ、印刷するにせよ、[西洋の]本の最終ページから始まり、イギリス人なら最初のページと呼ぶであろう方向へと進む。ただ、ヘブライ語は横書きであるのに対して、中国語と日本語は上から下へと書かれる。このインタビューを通じて、日本人の数のわりには、かなりの量の情報が得られた。私は、後に、ふとした会話や何度も繰り返された会話を通じて、もっと多くのことを学んだ。

「彼らのうちの最年長者はヘシェローHeshero〔平四郎〕という名前<sup>18)</sup>で、仲間内では「ご老体」the old man<sup>19)</sup>と呼ばれていた。彼は50歳くらいであったと思われるが<sup>20)</sup>、細身で、いくぶん背が低かった。彼は、彼らの間で図抜けて男らしく、非常に親切で誠実そうであった。彼は、自国の学校〔寺子屋〕をほとんど修了し、おそらく書字に最も長(た)け<sup>21)</sup>、我々に役立つ何かをしてきている時以外は、筆と墨でせっせと何かを書いていた。彼は、疑いもなく勤勉の鑑(かがみ)であった。彼は、また、非常に熱心な彼(か)の国の偶像崇拜〔仏教〕の信徒であったよう<sup>22)</sup>、偶像〔仏画〕を携えていたが、それはヴェルヴェットのような布地に描かれた光り輝く人物像に他ならなかった<sup>23)</sup>。その絵は巻かれ、ビーズの紐〔数珠〕とともに木の箱に収められたが、時には彼らが借りた部屋に、時には我々の家に、掛けられた。時々その姿が見えなくなることから<sup>24)</sup>、彼は毎日礼拝を行っている〔経を上げている〕ものと我々は推測した。彼が所有している他の物は、何でも彼は手放す覚悟ができていたようであった。しかし、我々が、時々、これ〔お掛け絵〕をアメリカに送ったら人々のよい好奇心の的になるであろうとほめかすと、彼は両手を握り締めて胸に当て、首を横に振って「サヨナラしたら、私、死んじゃう」‘By by me die’と言った。彼は、例の船の持ち主<sup>25)</sup>、日本ではもう1、2艘の船と、建造中の船を1艘持っているといわれ、おそらく金持ちだったのであろう<sup>26)</sup>。彼には妻が一人と<sup>27)</sup>、五人の子供がいた<sup>28)</sup>。捕鯨船に乗り移った時、彼は他の6人に支払うべき賃金を全額支払った。その最中に、彼らの間で議論が始まった。突風で操船不能となり、沖合に吹き流されるまでの賃金を受け取るべきか、という議論である<sup>29)</sup>。この問題はキャスカート船長の判断に委ねられた。

「3人のうち2番目の男〔次郎吉。図2〕は<sup>30)</sup>、年の頃は25歳か30歳くらいだったと思う。というのは、自分で何歳と言っていたか、私が忘れてしまったからである<sup>31)</sup>。背の高さは中ぐらいであったが、極めて筋肉質であった。そのことは、彼が海岸に赴いて、小麦粉の樽を肩に担いでくることを一度ならず引き受け、易々とそれを運んで床に下ろした——1ポンド〔453グラム〕の重さなら誰でもできるかも知れないが——ことから分かるであろう<sup>32)</sup>。彼は、船に事務員として雇用されていたのであろう<sup>33)</sup>。書字に熟達しており<sup>34)</sup>、絵を描くこともある程度巧みであった<sup>35)</sup>。彼の名はイジェロIjero〔栄次郎。次郎吉の幼名〕といった<sup>36)</sup>。ある意味で、彼は「ご老体」よりも頭が切れた。





図3 金蔵（『時規物語』より）

ハワイ語・英語の両言語を聞き取る心構えもできていて、私が得た情報の大半も彼からのものであった。

「3番目の男はキンシュウKinsiu〔金蔵。図3〕という名前で、16歳か17歳くらいであった<sup>37)</sup>。普段は口を利かず、少年にしては落ち着いた顔つきをしていたが、彼は、あらゆる面において、無為に時間をつぶすこと以外には何もやりたがらない少年のように見えた。

「当地に上陸した当初、日本人たちはある中国人の許で住み始めた。しかし、不満が生じたため、一日、二日して、彼らは我々の家に全ての持ち物を持ってやってきた<sup>38)</sup>。鉄枠をはめた箱を一、二個<sup>39)</sup>、いくつかの行李（こおり）basket trunk、かなりの量の衣類と「ご老体」の所有物である錢袋。彼らは、必要に迫られてか、他の理由からか、最初から我々に全幅の信頼を置き、金やその他の持ち物を我々が横領するなどとは全く考えずに我々に預けた<sup>40)</sup>。

我々の家で過ごした数週の間<sup>41)</sup>、彼らの大いなる目標は、オアフ島に渡る便をつかまえることであった。船で広東に渡ることを期待してのことであった。そこまで行けば、日本に帰る道が開けると彼らは考えていた<sup>42)</sup>。この点に関する彼らの思いは強固であった。何らかのタイプの船が停泊地に碇を降ろすたびに、彼らは私の所にやってきて「スクーナー」‘schooner’とか、「船、オアフ、行く」‘feni go oahu’とか言った。そうした際の「ご老体」の熱意は、筆舌に尽くしがたい。我々の前でうやうやしく頭を下げ、我々の子供を指さして「クドモ〔子供〕’kudomo’（日本の子供）」と言い、同時に5本の指を開いてみせて日本には5人の子供がいることを示した。反対側の手では目を指さして、「わたし、会ってない」‘me no see’と、優しい心の持ち主である親ならでは十全に分らないであろうような雄弁な表現で言った。」<sup>43)</sup>

1839年10月28日付のチェンバレン氏“Bro.” Chamberlain<sup>44)</sup>宛の書簡でゴールドウィン博士は次の

ように記している。「日本人について。おそらく4人は3隻の捕鯨船で既にオアフ島に到着しているものと思います。そうであれば、間違いなくあなたはジェームズ・ローパー号のキャスカート船長に救助された7人が乗っていた船のことは既にお聞き及びのことと存じます。彼らは、救助されるまで、5ヶ月にわたって船で漂流し、その間に3人が死んだものと私は理解しています<sup>45)</sup>。〔中略〕彼らが荷物を一切切切持って私どもの家に来てから10日になります。彼らは興味深く、私どもは彼らが中国に向かって出航するまで手元に置いておけることを喜んでいますが、しかし、彼らはオアフ島に辿り着けるかどうか極めて神経質になっており、最初の好機を逃してなるものかと考えています。そこで、私は、彼らをあなたに推薦したいと思います。可能であれば彼らを我々の宣教会に留めておくことは、我々の義務だと思えます。そうすれば、彼らが我々の宣教活動に関して悪評判を聞くことなく、好感を抱くでしょうし、中国に行っても我々の同志の許に向かわせることができるものと思われま。

「仕事に追われながらも、私は、可能な限り彼らの言語と習慣を知ろうとしています。彼らの数の数え方は非常に単純で規則的なので、1時間もあれば、誰でも1兆まで数えられるようになるでしょう。彼らは、十進法を採用しています<sup>46)</sup>。ある日、彼らがドアの脇に立っていた時、私は、オアフ島に行ったら、宣教会の建物に行って、そこに住むのが良いと思う、と言いました。「ご老体」は、ドアの階段に向かって、つまり、頭が脚に付きそうになるくらい、3度、頭を下げました。非常に深い感謝の表現です。「ご老体」の世話をあやまないように。彼は日本ではほとんど酒を飲まなかった、と彼らは言っています<sup>47)</sup>。彼は、帰国することを強く望んでいます。

「1839年11月1日。たぶん、パアルアPaalua号に3人の日本人の便を確保できそうです。そうであれば、彼らをあなたの許に送り、私が当地でしばらくの間そうしたように、あなたの許で世話してもらうことができるでしょう。彼らは、あなたの家族のどなたの重荷にもならないと思います。クック氏bro. Cookeが一人を引き受けてくれるでしょうし<sup>48)</sup>、ダイヤモンド氏bro. Dimondがもう一人を引き受けてくれたら理想的かもしれません<sup>49)</sup>。彼らは、日本にいる間、多かれ少なかれ、酒（米から作った）に親しんでいました。もしオアフ島で酒飲みたちの間に放したら、彼らが酒を飲まないわけではない、と私は思います。「ご老体」は、飲まないと思いますが。

「もう一つ私が気に掛けていることは、彼らが島にいる間、散財させるようなことがあってはならないということです。私は、彼らから何ももらおうとは思っていません。それどころか、彼らの滞在に対して全く報酬を欲していないことを示すために、彼らにいくらかの金銭とちょっとした布とを与えようと思っています。彼らは勤勉そうで、役に立ちそうです。彼らが今すぐ出発するかどうかはともかく、彼らに関するあな

たのご意見をお聞かせいただければ幸いです。

「彼らを急いで行かせて申し訳ありません。でも彼らはオアフ島に辿り着けるかどうか不安がっているのです。そうしないと、中国に渡り、それから日本に帰って妻や子供たちに再会する機会を失ってしまうと思っているからです。もし中国行きの船がなかった場合、あなたの判断で何人でも当地に送り返して待機させるようにしてください。私は、彼らに経済的負担を掛けさせることなく、彼らの面倒を見るつもりです。ジャッド博士Dr. Judd<sup>50)</sup> かビンガム氏Mr. Bingham<sup>51)</sup> に日本の数字の桁について手紙で教えてくれるよう、頼んでくれませんか。私は、短時間の間に10万からゼロが60付くくらいまでコピーしたのですが、それ以上書き留める時間はありませんでした。見たところ、おそろしく単純な仕方、無限までいくようです<sup>52)</sup>。」

レヴィ・チェンバレンの日記には次のように記されている。「1839年11月1日。パアルア号が今朝到着した。この船から、海で救助された4人<sup>53)</sup>の仲間の3人の日本人が降りてきた<sup>54)</sup>。4人は、当地にしばらく前から滞在していた<sup>55)</sup>。ラハイナに上陸した3人の面倒を見るよう、ボールドウィン氏から強い要請があったので、パーカー氏<sup>56)</sup>が全体会議の間の自分の宿泊用に建てたレンガ造りの建物に収容することにした<sup>57)</sup>。

「1839年11月5日、火曜日。今朝、ジョージGeorge<sup>58)</sup>が、我々が泊めている日本人のうちの一人の具合が悪いと報せにきた。仲間たち〔次郎吉と金蔵〕は、彼は夜の間に病気になる、そのため、彼らは、皆、一睡もできなかった、また、〔次郎吉と金蔵は、少し眠りたいので、〕食事は要らない、と言った。「ご老体」が病氣と聞いて、私はジャッド博士に報せに行くようジョージに命じた。彼は直に出掛けたが、ジャッド博士を見つけることができなかった。ジョージは、昼頃、日本人たちが宿泊している家に行き、驚いたことに、「ご老体」が死んでいることに気付いた。身体が完全に冷たくなっていることから判断すると、「ご老体」はいつの間にか息を引き取ったものと判断された。この報せを聞くや、私はジョージに〔ジャッド〕博士に遺体をあらためるよう注意を促して欲しいと頼んだ。その結果、そのとおりに〔遺体の検証が〕行われた。故人の二人の仲間〔次郎吉と金蔵〕の証言から、死因は腸痙攣か腸炎と結論された<sup>59)</sup>。日本人たち〔次郎吉と金蔵〕は、ジョージが、昼頃、起こしに行くまで、仲間が死んだことに気付かなかったようである。彼の衣服を脱がせた時、彼らは、彼が眠っているものとまだ思っていたもので、彼が硬く、冷たくなっていることに気付いてショックを受け、頭を垂れ、多くの涙を流したが、泣き騒ぎはしなかった。

「同じ船で一緒に難破し、遭難中に何度も襲ってきた死の顎（あぎと）から共に救助された他の4人は、悲しい出来事を知らされて、ともに涙を流し、彼らの仲間にして指揮官であった人物（というのは、故人は難破船の所有者であったから）の遺体に迷信じみた儀式を行うためにやってきた。

「私は、棺を作らせ、墓地の中で遺体を埋葬すべき場所を指定した<sup>60)</sup>。こうした気遣いに彼らは感謝し、すぐにも埋葬を執り行うことを望んでいるようであった。しかし、全てをこなすには時間が足りなかったので、埋葬は翌日まで延期するのが最良と思われた。また、死は突然に、しかもこうした状況下で起こったので、遺体をもっと詳しく検証するのが適当と思われた。検証は、夜にジャッド博士によって行われた。夜には、国王〔ハワイ国王カメハメハ3世〕もやってきた<sup>61)</sup>。死因に関しては、不正を思わせる何ら疑わしい点もジャッド博士には認められなかった。それどころか、ジャッド博士にとって、〔平四郎の死は〕神意の顕れの一つであり、自らの意志によって全てを行い、かつそれについては何事もお語りにならない方がヴェールを降ろしたものと思われた。

「1839年11月6日、水曜日。異邦人の埋葬が共同墓地で行われた。きわめて多数の現地人、教会関係者、その他の人々が遺体がきちんと棺に収められて横たわっている家を集まってきた。遺体は台車（のヴェルヴェットの布の上）に載せられ、（現地人たちによってロープで）墓地まで挽いて行かれた。その後、弔問者として日本人たちが続き、さらには現地人たちが列になってこれに続いた。墓地では、ビンガム氏が聖書の一節を読み、祈禱を、一部は現地語で、一部は英語で、捧げた<sup>62)</sup>。

「ボールドウィン氏の手紙によると、この男の名は平四郎Hesheroといった。彼は、日本に妻を一人と子供たち——三人の息子と二人の娘——を遺していった<sup>63)</sup>。彼の帰国の願いは強かった。しかし！彼は、あれほど愛していた人々の顔をこの世では再び見ることなく、永遠の家へと去った<sup>64)</sup>」

ボールドウィン博士は語る：「それから間もなく、栄次郎Ijero〔次郎吉〕は、中国に向かう船便がないので、当地に戻ってきた<sup>65)</sup>。オアフ島に直行した〔メンバーのうちの〕3人も一緒だった。彼らは、名を、それぞれ日本語で、「六 Roof」、〔七 Shetz〕、「八 Hach」〔六兵衛、七左衛門、八左衛門〕といった<sup>66)</sup>。栄次郎と3人のうちの一人<sup>67)</sup>は我が家に行くぶん長く滞在したので<sup>68)</sup>、彼らについて、彼らの言語について、彼らの宗教について、彼らの国について、より詳しく知る機会が何回もあった。会話は、先に記したように、最初は限られていて、難しかった。しかし、彼らが次第に英語とハワイ語の単語のいくつかを理解するようになり、また、私も日本語の単語をいくつか覚えたので、抽象的な事柄はさておき、何でも互いに理解させることが次第にできるようになった。

「以下は、この不運な一行に関する情報の主な点である。彼らの船というかジャンクの名はチョアジャムルChoajamur〔長者丸〕といった。船も、船主も、乗組員たちもイコIkoと呼ばれる地に属していた<sup>69)</sup>。栄次郎Ijeroは時折「イコの国」Iko no quinyeといったが、この言葉の最後に付け加えられた部分〔「の国」〕が何を意味するものか、私には分からない。この地は

日本列島で最大の島である本州island of Nipponにあり、〔日本列島の〕北限と南限の中間あたりにあるこの島〔本州〕の西半分にある湾のどこかにある。そこは首都江戸Jedoのほぼ反対側にあり、江戸からはおそらくほぼ北西方向にあたる。彼らによれば、イコは、江戸から100マイル〔160キロメートル、40里〕の距離にあり、徒歩で旅すると十日かかるという。その〔イコの〕位置は、佐渡島island of Sodoの位置から見当を付けることができるであろう。佐渡島は上記の湾の北にあたり、イコから70マイル、すなわち船で1日の距離にある。佐渡島は金と銀が豊富である。

「長者丸Choajamurは沿岸商業に従事していたようである。彼らは、米や米から作った酒、干し魚を搭載していた。彼らは本州の西海岸を北上し、本州島の北端にある海峡、すなわち本州島と蝦夷島island of Iesso〔北海道〕ないしはマツマイMatsmai〔松前〕の間にある海峡を通った。ここで彼らは、西からの強烈な暴風に見舞われ、太平洋へと押し流された<sup>70)</sup>。陸地を見失い、帆柱を折られ、後に残ったものは難破船だけであった。しかし船体はそれほど傷んでいなかった、とういうか、少なくとも結局のところひどく浸水はしなかった。突風の後も彼らは陸地の方角がよく分かっていたに違いない。というのは、「ご老体」は小さなコンパスを持っていたからであった。このコンパスは、彼の死後、私に贈られた<sup>71)</sup>。彼らは、また、船を操るために、何とか応急マストらしきものを立てようとした。しかし、おそらく円材と索具が不十分であったことに加えて、風向きに恵まれなかったこと、並びに、冬の間、この海域では常にそうであるように、たびたび西風が吹いたために彼らは島〔本州島〕に戻ることができず、逆に東へ東へと流された。こうした惨状の中で五ヶ月にも及ぶ長く困苦な月日を送るといふ災難に彼らが最初に出会ったのは、1839年の1月1日頃であったろう<sup>72)</sup>。この災難は、6月6日に本州とサンドウィッチ諸島の中間地点付近でジェームズ・ローパー号に遭遇するまで続いた。ジェームズ・ローパー号と遭遇する直前、彼らの飲み水は尽きた。六日の間、彼らは飲むものが一切なく、雨の兆候を求めて天を見つめた。米もなくなり、魚〔干し魚〕だけが残った。一行は当初10名であり、この事態〔渇水〕が襲いかかるまでは、彼らは難破しながらも全員が生き延びていた。この渇水の頃の彼らの苦しみは過酷であった。彼らは、ひからびた舌を冷やすために、銀貨を口に含もうかと話し合った。3人の乗組員が死んだのは、この頃のことであった<sup>73)</sup>。残りの7人は体力を消耗して、皆（頑健な栄次郎でさえ）一人で立つことができず、甲板の上を這うほか無かった。6日目の終わりに雨が降り、彼らは生き返った。彼らは、最初は両手で雨を受け、その後、容器で雨を受けた。この雨のおかげで、彼らは難破船から救助されるまで、水を確保することができた。以上が、彼らの遭難に関して私が覚えている最も重要な点である。

「彼らの国に関して私が知り得た興味深い点は多々

ある。その一つは、我々が彼らの住む島を呼んでいる「ジャパン」Japanという名称を彼ら自身は全く知らないということである。最大の島を彼らは、最後の音節にアクセントを置いて、「ニッポン」Nippon〔日本〕と呼ぶ。北にある島は、彼らは普通「マツマイ」Matsmai〔松前〕と呼ぶが、「イエソ」Iesso〔蝦夷〕の名前でも知っている。南の「キウシュウ」Kiusiu〔九州〕にあり、オランダ人が取引を許されている地は、我々の地図には「ナガサキ」Nagasaki〔長崎〕と記されているが、彼らは、2番目の音節にアクセントをおいて、「ナナシグ」Nanasigの名で専ら呼んでいる。たぶん、朝鮮半島Koreaにあるものと思われるが、日本の船が大挙して貿易に行く地があり、彼らはそこを「チューシン」Chusingと呼んでいる<sup>74)</sup>。本州から、船で二日の地である。

「私が得たもう一つの情報は、この国の大部分の間間はかなり酒を飲む、ということである<sup>75)</sup>。彼らによると、彼らは午前中に仕事をし、一日の残りの時間は酔っぱらって寝ているという。彼らが飲む酒は、それ専用に作られた巨大な樽の中で米を発酵させたものである。その製造工程は、「常に」でなければ「一般に」、蒸留せずに発酵させるものと思われる。

「日本での食べ物について聞かれた時、彼らは「皆、朝、米を食べます。昼も米を食べ、夜も米を食べます。今日も米を食べ、明日も米を食べ、翌日も米を食べ、毎日米を食べます」と答えた。魚はよく食べるが、動物は、たくさんいるが、食べない。

「彼らの偶像崇拜の体系〔宗教体系〕については、私はほとんど学ばなかった。彼らは、彼らの宗教について記した何冊かの本〔経本か〕を携えていた。彼らは、日本には主な崇拜対象godが5体あり<sup>76)</sup>、それよりも下位の崇拜対象は多数ある、と述べた。彼らが我々の許にいた間、私はことあるごとに彼らをキリスト教に誘ってみたが、どうもうまくいかなかったようである。彼らはしばしば我々の集会に出席し、注意深く、考え深そうな顔をしていたが、こうした問題をめぐる会話のあと、栄次郎〔次郎吉〕は、たいてい、「アメリカ人の神はアメリカ人のもの。我々には我々の神々〔仏様方〕の方が良い」と述べた。

「生き残りの6人の日本人たちは、今、オアフ島にいて、彼らを故郷に帰してくれる機会を不安げに待っている。彼らのうちの何人かは、故郷に妻と子供を持っており<sup>77)</sup>、また、全員が友人たちを持っている。そうした友人たちの顔は、彼らの脳裡に昨日別れてきたばかりのようにまざまざと浮かび上がってくる。彼らは、そうした妻子や友人たちに再会することを待ち望んでいるのである。彼らは、たぶん、広東経由で日本に辿り着けるであろう。さもなくば、カムチャツカ経由で。商船か軍艦が彼らに帰国の手を差し伸べてくれれば、彼らのみならず、人間愛という大義を愛する全ての者に幸福を与えてくれるであろう。」

数ヶ月後、『ポリネシアン』紙に次のような記事が掲載された。「ピアース・アンド・ブリューワー商会



firm of Pierce & BrewerのH・A・ピアース<sup>78)</sup>の篤志により、日本人たちにカムチャツカ行きの船の便が出帆前夜に与えられたことを知って、読者は欣快の念に満たされることであろう<sup>79)</sup>。彼らが当地にやってきて以来、ピアース氏は彼らが母国に戻るあらゆる便宜を与えてきたのであった。

帰途、日本人たちはいくつかの地にさらに留まることを余儀なくされたが、最後に、故国に4年半ぶりに戻る事ができた<sup>80)</sup>。

最近、ホノルルの宣教会図書室は、3巻からなる文書を手に入れた。栄次郎によって手書きされ、日本風に綴じられており、船で難破した男たちの物語を語り、また、彼らが訪れた新たな地や情景に関する様々な情報を記したものである<sup>81)</sup>。彼らがアメリカの婦人や子供たちを見たり、キリスト教会の建物に住んだりしたのは初めてのことであろう。彼〔次郎吉〕は、アメリカの宣教師たちについて語り、ハイラム・ビンガム師 Rev. Hiram Binghamに賛辞を贈り、また、次のように記している。「私は、船長の限りない親切に深く感動している」<sup>82)</sup>。

### 参考・引用文献

- 池田皓 (編) 1968『日本庶民生活史料集成』5「漂流」東京：三一書房。  
高瀬重雄 1974『北前船 長者丸の漂流』京都：清水書院。  
プラマー、キャサリン 1989『最初にアメリカを見た日本人』酒井正子訳 東京：日本放送出版協会。  
室賀信夫；矢守一彦 (編訳) 1965『蕃談 漂流の記録1』東京：平凡社 (東洋文庫)。  
Alexander, Mary Charlotte 1953 *Dr. Baldwin of Lahaina*, Berkeley, California: Stanford University Press.  
Judd IV, Gerrit P. 1960 *Dr. Judd, Hawaii's Friend*, Honolulu, Hawaii: University of Hawaii Press.

### 注

- 1) 原文は、Mary Charlotte Alexander, "Dr. Baldwin of Lahaina", Berkley, California, 1953の第10章 'Wrecked Japanese at Lahaina'。
- 2) ドワイト・ボールドウィンの玄孫 (やしゃご)にあたるという (Alexander, p.349)。
- 3) ドワイト・ボールドウィン博士 Dr. Dwight Baldwin (1798-1886)。『蕃談』にいう「ミス、テ、バラオイナン」(「ミス、テ」は「ミスター」)、「漂流人次郎吉物語」では「ミステハラライナ」。「蕃談」に「島〔マオイ島〕の米利堅法使ミス、テ、バラオイナン」と紹介されている (243頁)。「時規物語」では、なぜか「ボールドウィン」の名前は記されず、「ムマライ〔マウイ島〕のミヒナレ」の呼称で登場する。「ミヒナレ」は「ミッションナリー」Missionaryすなわち「宣教師」の意味。
- 4) 以下、×頁のボールドウィンのチェンバレン宛の書簡より前の部分は、ホノルルで発行されていた『ポリネ

シアン』*The Polynesian*紙の1840年8月1日号に掲載されたボールドウィンの投稿記事であるらしい (プラマー、48頁、160頁)。

- 5) 『時規物語』『蕃談』では「ゼンロッパ」号、「漂流人次郎吉物語」では「ゼンロッパ」あるいは「ゼンロッパ」号。「時規物語」に「アメリカのナンタケ〔ナンタケット島〕の鯨船」と紹介されている (8頁)。
- 6) 『時規物語』では「キャップン、ケツカル」、『蕃談』では「キャップン、ケスカ」。「撒土微私漂流記」では「キャフンケブカリ」(「キャフンケツカリ」の誤記と思われる)。「漂流人次郎吉物語」には「親方の名はケヤフンケスカ」と紹介されている (225頁)。「漂流人次郎吉物語」には、「大將は五十歳斗、丈六尺四、五寸なる男にて」とあり (222頁)、『蕃談』には「ケスカは金穴〔金持ち〕にして巨船七隻を有せりと」とある (241頁)。
- 7) 『時規物語』は「〔天保十己亥四月〕廿四日」と記し、「彼壹千八百三十九年六月五日」と換算している (8頁)。ボールドウィンの伝える救助日とは1日ずれているが、ニューベッドフォード捕鯨博物館に所蔵されているジェームズ・ローパー号の航海日誌にも、救助日は1839年6月6日と記されているという (プラマー、176頁)。一方、日本側の記録では、「撒土微私漂流記」でも救助日は「四月廿四日」とされ (213頁)、『蕃談』に収められた次郎吉の談話にも「同月廿四日と思ふ日」とある (301頁)。「時規物語」に記された陽暦とアメリカ側の記録との間には救助日に1日のずれがあるが、これは長者丸乗組員が天保十年の暦を持っておらず、自分たちで独自の日付計算をし(『時規物語』、6頁)、それを『時規物語』の編者が機械的に西洋の日付に換算したことによるものではなかろうか。
- 8) 「〔越中〕富山古寺町能登屋兵右衛門持舟、六百五十石積、長者丸」(『時規物語』、8頁)。
- 9) 「同〔天保十年〕五月中旬 (割注：彼八月上旬)、六兵衛をキャップン、ジャイキの船へ移し、太三郎をキャップン、ホーシタの船へ移し、平四郎、次郎吉、金蔵はキャップン、ケツカルの船にのこり、八左衛門、七左衛門二人は別船に移り (割注：船頭名しれず)、云々」(『時規物語』、8頁)。「六兵衛はキャップン・ジャイキの船へ移し、八左衛門、七左衛門二人は何と申候船に候哉、夫 (それ) へ移し、太三郎はライメタンヌイベルフル (亜墨利加の内地名のよし、詳ならず) キャップン・ポーシタの船へ分け、平四郎、次郎吉、金蔵は初めのままにて、ケツカルの船に罷在候。右は外鯨船より日本人を分けくれ候様申たる様子に候」(同、26頁)。
- 10) 「此嶋〔マウイ島〕の総頭はアメリカより来り居候御坊様やうの人をミヒナレ〔宣教師。ボールドウィンのこと〕と唱申候。此ミヒナレへケツカルより頼申候趣は、アメリカの「マノワ」〔Man of War. 軍艦〕追付参り候筈、夫へ頼み序 (ついで) に日本へ贈り返しくれ候へとて、三人を此処に残し、名残をしみ涙を流し相別れ候」(『時規物語』、41頁)。「夫よりサントイチのマライのシヤラホイ〔ラライナ〕と申湊へ着、元船親方の大將はケヤフンケスカ〔キャプテン・キャスカート〕と申、此地の御寺ミステハラライナ〔ミスター・ボールドウィン〕と申御寺と類家にて、其寺へ私共を連行、何か和尚へ元船の船主ゼンロッパ〔ジェームズ・ローパー号。船長キャスカートの誤りであろう〕と申咄し候処、悉く世話致し、出家をチヨチ〔church. 教会〕と申、其寺仮小屋にて、十間に式拾

- 間斗有之、休事ゴシヨリゴシヨリと申候、其寺に逗留致し、翌朝ミイロと申て、洗粉出し、頓（やが）ての事、バンバイ〔‘Bye-bye’〕と申、仲間の者共に、いつ頃一集可相成と申候処、ウハホ〔オアフ島〕と申處にて一集に相成候と申聞候」（『漂流人次郎吉物語』、228-229頁）。なお、文中、ポールドウインの家は「仮小屋にて」とあるが、後日、次郎吉と八左衛門がポールドウインの家の普請を手伝ったという記録が『時規物語』にある（76頁）。『蕃談』所収の次郎吉の証言によると、別離の時、キャスカート船長は次のように述べたという：「其方たちを如此に助け世話したるも、前世は其方たちに助けられたるなり。何れ今別れては、今生に再び逢ふ事あるまじ。我は老人なれば間も無く天に升るべし。其方たち跡より来るべし」（301頁）。ただし、この時点で次郎吉がどこまで英語を理解できたかは不明である。この文は、キャスカートの意を呈して次郎吉が創作した文と考えるべきであろう。
- 11) 『時規物語』には次のようにある：「〔救助された日の〕暮頃右船〔長者丸〕を焼たる火を見請候舩にて、ケツカル船と同様の船壹艘走り寄り、旗合をなし（割注：此船はケツカルと同国にて、船の名はヲバメーチョーと申候。船頭の名は覚不申候）」（24頁）。次郎吉らが「オーベッド・ミッチェル号」の船名を覚えていたことには、驚かされる。同船との邂逅に関しては、次のような記録もある：「日暮てより櫓の上大騒ぎ致し候に付、私儀上へあがり、見受候へば、帆柱のしんに袋壺つ有之、是は遠眼鏡にて異国船壹艘相見え候処、中の帆引下げ、表に〔表と？〕鱧と帆式枚にして、せり合に相成、二尺斗に相成候処、はれろ〔‘Hello’？〕と申候処、我々たんき〔談義？〕と申て、長六尺斗のシツボ模様の白と赤との壺尺程宛染わけの旗印上げ、舩（てんま）下し候へば、彼船の者共皆々私共異船へ移り、暫時相立候処、私共を呼て絵図壺枚出し、シヤバ子（ネ）相立ヤバ子〔‘Japan, Japan’もしくは‘Japanese, Japanese’〕と申、私共へ万国の絵図を為見、四国か加賀か能登か越後か九州か蝦夷か薩摩か南部かと相尋候に付、蝦夷と申し候。何れも酒盛致し、私共へも猪口に入呉候に付、水を交ぜ吞候得共、夫にても日本の酒より辛い事也。其内水主共の内四人宛かいかい〔？〕に相成、夜四ツ時〔午後10時〕に鉄砲ドンドンと打立候に付、身請〔見受〕候へば、長壺尺斗の硝子の提灯に水色の蠟燭を焼（とも）し、高へ釣上げ、夫より舩（てんま）へ拾式人斗り乗移り、大將は櫓の上にて提灯振あげ歩き、ゴリバイゴリバイ〔‘Good-bye, Good-bye’〕と手をふり、ホロホロ〔‘Hello, Hello!’〕と申候処、あちらもホロホロと申す私共異船は其処に罷在」（『漂流人次郎吉物語』、223頁）。次のような記録もある：「是日八ツ時分〔午後2時頃〕並に晩前に、別々異国船一艘づつ来り、漂流人を助けたるを聞て大に賀し、ナンタケ船主〔キャスカート〕をとう〔塔。船橋〕に上げたり」（『蕃談』所収の次郎吉の証言、301頁）。ここでは、2隻の船がやって来たことと述べられているが、このことを記すのはこの記録だけであり、どこまで信頼できるかは不明。
- 12) 「此所は経度九十七度零、緯度三十三度零。この度数はサノイツ〔サンドイッチ諸島＝ハワイ諸島〕、ムマライ〔マオイ島〕のミヒナレ〔＝ポールドウイン〕より次郎吉承候度数なり」（『時規物語』、22頁）。ただし、経度は「高橋景保新訂地球全図に因て印度海正中の線を経度の初度とす」という（『時規物語』、9頁）。現在の経度とは誤差があるため、簡単に換算はできない。
- 13) 「ケツカル七人の者どもを矢倉の上へ連行、長者丸を指さし、薄き板をさきとり、火を摺出し、夫に息を吹かけて見せ候へ共、合点ゆき不申、いづれも唯うなづき居候へば、やがて舩をつかはし、長者丸に火を掛候と見え、程なく火気甚敷燃あがり申し候。……舩を焼き候は、夜中往來の船に障り候ゆゑ、焼捨たる由後に承り申候」（『時規物語』24頁）。
- 14) 「其翌日〔救助された翌日〕より粥半合ばかり四五杯宛、朝昼夕三度くれ申候。外に麦団子やうのものを（割注：これをブライル〔パン〕と申候）、かねの皿に盛出し候。此分は心の儘に食し申事に候。七八日過候後は、ケツカルの食事方と同様にて、粥并ブライル外に塩漬の牛、家猪（ぶた）類の肉を煮てくれ、四五日目毎に家猪鶏などの生肉、又は芋などもくれ申候」（『時規物語』、25-26頁）。
- 15) 「七人の者へ新敷木綿の筒袖の着物、股引、沓たび、帽子等あたへ着替させ候に付、是迄の分脱捨、異国人同様の姿に相成候」（『時規物語』、26頁）。「平四郎等ケツカル船に、五箇月罷在候間に、鯨八本取申候。其砌刃物を礪（とぐ）ろくろを廻す手伝などいたし、其外は暇に罷在候処、長持ようの内に多く貯候木綿を取出し、勝手に仕立着いたし候へと、申舩に色々手真似いたし候。それもいかかと見合居候へども、後には切裁候て、彼等の着したる服の様にこしらへ着申候」（『時規物語』、26頁）。
- 16) 救助された時、ジェームズ・ローパー号に運ばれた品のなかに「少々貯候候貳歩金、壹歩金、壹朱銀」があった（『時規物語』、24頁）。
- 17) 「貳歩金等帰国まで所持いたし罷在候」（『時規物語』、24頁）。
- 18) 「船頭 越中富山木町浦吉岡屋平四郎 天保九戊戌歳五拾歳計」（『時規物語』、13頁）。後述の次郎吉が記した墓誌によれば、この年、数えて53歳であった。「吉岡屋」は、屋号。
- 19) ‘the old man」という表現が日本語で何に該当するかは不明であるが、ここでは「ご老体」と訳しておいた。
- 20) 次郎吉がカタカナで記した平四郎の墓碑には「越中の国富山木町浦直船頭吉岡屋平四郎五十三歳、此度此処に落来て、長々病氣に付、此処にて病死に及ぶ」（原文、片仮名）と記されているので（『蕃談』、244頁）、この年、数えて53歳であったことが分かる。
- 21) 平四郎が漢字の読み書きができたことは、中国人と対話したことから分かる。
- 22) 長者丸乗組員は全員一向宗（浄土真宗）の門徒であったという（『時規物語』、16頁）。
- 23) この仏像は、阿弥陀仏のお掛け絵である。『時規物語』にはその絵を載せ、次のように記している：「阿弥陀仏像 長者丸舩中に安置する処の吉岡屋平四郎所持、弥陀の掛物、難船以來も漂流人共殊の外大切にいたし、無恙持帰、江戸表御勘定所へ御取揚置、帰村の御御渡の品に付、これを写」（159頁）。この図と、航海中、船の「仏壇」に供えてあった「お掛け絵」が同一かどうかは不明。後者は、『時規物語』に「〔遭難中、〕八左衛門は仏壇の弥陀の掛物懐中いたし候を、六兵衛今一度拝み度と乞候ゆゑ、取出しおがませ候」とあり、さらに「此弥陀の掛物は後々までも所持いたし罷在、江戸表にて太三郎より指上候処、御渡に相成候ゆゑ、当時は八左衛門家に有之候」とある（17頁）。八左衛門が、遭難中、この「お掛け絵」を懐中していたの



は、彼が「親司」（船頭の補佐役）であったためであろう。

- 24) この個所、意味が取りにくい。原文：“and from its being missing at certain seasons,” (Alexander : 112)。
- 25) 次郎吉が記した平四郎の墓碑には「直船頭」とあり、次郎吉はさらに「己の船に乗するを直船頭と云、他人の船を假〔＝借〕を沖船頭と称す」と解説している（『蕃談』、244頁）。これによると長者丸は平四郎の持ち船だったことになる。しかし、『時規物語』には長者丸は「能登屋平右衛門持船」と記されている（14頁）。長者丸は平四郎の所有であったが、能登屋平右衛門方に船籍を置いていたということであろうか。
- 26) 「船頭平四郎は元来売薬商人にて、船方に疎く」とある（『時規物語』、16頁）。
- 27) 平四郎の菩提寺である富山市青柳の性宗寺の過去帳には、天保十四（1843）年六月十六日の条に「妙教、吉岡屋平四郎妻」と記されているという（高瀬、80-81ページ）。これが平四郎の妻であろう。
- 28) 富山市の性宗寺の過去帳には、安政元（1854）年十月晦日の条に「教誓、吉岡屋平四郎子」と記されているという（高瀬、81頁）。平四郎の5人の子のうち一人であろう。なお、平四郎に5人の子供があったことは、日本側の記録には出てこない。
- 29) この個所も意味が取りにくい。原文：“In doing this, a dispute arose among them, whether they should receive pay up to the time when it was disabled in the gale, and driven from their own coast.” (Alexander : 113)。
- 30) 「同〔追廻〕越中新川郡東岩瀬浦方米田屋七郎右衛門弟 次郎吉 同〔天保九戊戌歳〕貳拾六歳 幼名 栄次郎」（『時規物語』、14頁）。「追廻」は「諸事に遣〔つかわ〕れ、船頭等の用事も弁じ申候」という（同）。
- 31) 次郎吉は天保九（1838）年に数えて26歳であったから、この時、数えて27歳である。
- 32) 次郎吉が力持ちであったことは、日本側の記録に色々記されている：「当所〔ハワイ〕土着（じく）人と次郎吉相撲を取、又石にて力持をいたしくらべ候事有之候へども、土着（じく）人はいづれも力劣り候様に覺申候。又ロシヤ領にても、力持などいたし申事有之候」（『時規物語』、75-76頁）。「カムサツカにて海浜を散歩せしとき、土人の米菴を倉に輸するを觀て、技癢に堪えず。之を助け大菴十六貫余なるを二個擔へり。土人驚愕し潜〔ひそか〕に酋〔司令官〕に告ぐ。酋〔司令官〕客〔次郎吉〕を招して之を試み、大に嘉獎す。其從卒を顧み、隊中克く兩菴を一肩に駄する者有やと問ふ。卒無と對へり。客後には三個を荷へり。又屢蕃人と角觥せしか、彼人は魁梧なれば客之と對する毎に首を仰ぐ。然れども技倆なく一味に前推するを以て左右に排撤すれば則ち躓倒す。之に勝易々たり。夷等喝采して日本には敵せずと贊揚す。客膂力あり。漂前浪花にて船長某の募に応じ、新鑄の鉄錨七十二貫なるを扛て酒一樽を得し事あり。是豈尋常の力ならんや、夷人の称賛亦当れり」（『蕃談』、293頁）。「此處〔カムチャツカ〕にて四拾メ日程宛、荷物川端より御代官の宅へかたねて、次郎吉荷を揚候處、大きにあきれ入申候、其内六尺五寸斗有之男と次郎吉と角力取候處、ハズミにて寝させ申候、何程取ても次郎吉をまかせ居不申、腹立の顔して居申候」（『漂流人次郎吉物語』、232-233頁）。
- 33) 次郎吉は「追廻」役であった。



図4 遭難中の金蔵（左、自殺前の金六。『時規物語』より。）

- 34) 次郎吉は、片仮名と簡単な漢字が書けた。そのことは、彼が書いた平四郎の墓碑から分かる。次郎吉は、この墓碑に「大日本」と記し、また「エツチユウノクニトヤマキマチウラヂキセンドウヨシロカヤハイシロウゴヂユウサンサイコノタビコノトコロニマチキテナガナガビヨウキニツキコノトコロニテビヨウシニヲヨブ」と記した（『蕃談』、244頁）。また、オホーツク滞在中のエピソードとして「当所ナチャニカ〔司令官〕下役の者へ、次郎吉片仮名を教へ、又外の者へ四海波等の小謡四五番教へ候事有之候へ共、音声違ひ分りかね申候」ともある（『時規物語』、115頁）。
- 35) 次郎吉は絵が巧みで、『蕃談』の挿絵は皆次郎吉が描いた（『卷中諸図、皆漂子席下所写』）という（『蕃談』、300頁）。
- 36) 「〔ハワイの〕広東人六兵衛を「ロクロク」と呼び、金蔵を「コンサン」と申候。是は名を金蔵と書付見せ候ゆゑと存申候。又六兵衛を「ヤップン」或は「ヤブン」と呼申候。「ヤップン」は日本の事にて、是は日本人と呼申意と察られ申候。アメリカ人は次郎吉を「エージ」と呼申候。是は次郎吉の幼名を栄次郎と申候ゆゑ、太三郎等常に栄次と呼候を承り、かく申候哉と存られ候。六兵衛を「ロクロク」、金蔵を「キンゾー」と呼申候」（『時規物語』、76-77頁）。
- 37) 「同〔炊〕越中射水郡放生津新町中野屋勘右衛門弟金蔵 同〔天保九戊戌歳〕拾八歳」（『時規物語』、14頁）。『時規物語』の図（21頁）を見ると、彼は、遭難時、前髪も上げていない若者であったようである（図4）。
- 38) この記述は『蕃談』や『時規物語』に記された事実と少し異なる。両書によると、平四郎・次郎吉・金蔵を載せたジェームズ・ローパー号は、最初、「ウワヘ」島（ハワイ島。当時の名称は、オウィヘエOwhyhee島）の「ヘイド」（ヒロHillo）に到着した。3人は、広東人の時計師の許に預けられたが、数日後の夜中にキャスカートがやってきて、3人を救い出し、ジェームズ・ローパー号に乗せて急遽島を離れた。広東人に3人を同地に留め置いて使用しようとする意図が見えたためという。ジェームズ・ローパー号は、翌日昼頃、「ムマライ」島（マウイ島）に到着した（『時規物語』39-41頁。『蕃談』242-243頁）。ハワイ島に滞在した日数は、『時規物語』と『蕃談』とで異なるが、両者を勘案すると、ジェームズ・ローパー号は、1839年11月

- 14日か15日にハワイ島に到着したようである。
- 39) 救助された時、長者丸から「損たる小箆等」を解でジェームズ・ローバー号に運んだとあるので(『時規物語』、24頁)、ここでいう「鉄で粹取りした箱」というのは船箆等をいうのであろう。
- 40) 既に記したように、平四郎が所持していた貳歩金などは「帰国まで所持いたし罷在候」という(『時規物語』、24頁)。
- 41) 正確には、13日間である。
- 42) 実際には、折から勃発したアヘン戦争のため、広東行き船の便が無く、一行はカムチャツカからオホーツク、シトカを経て択捉島に帰還した。
- 43) ここまでが、ボールドウィンがPolynesian紙に投稿した記事であるらしい。
- 44) ハワイ宣教師団の一員で運営代理人business agentとして総務・会計業務を担当していた。日記に見られるように長者丸乗組員とも交渉があったはずの人物であるが、日本側記録には登場しない。
- 45) 天保十年一月二十四、五日頃、「炊」の五三郎、渴死。四月十二日頃、「片表」の善右衛門、病死。四月十五日頃、「表」(航海長役)の金六、漂流の責任を取って投身自殺。
- 46) この個所も意味が取りにくい。原文：“They go by tens” (Alexander : 114)。
- 47) この後、飲酒に関する話題がたびたび出てくるが、これは、当時、ハワイの宣教師団が、現地人の飲酒癖を見て、飲酒撲滅運動に取り組んでいたためである。ハワイ宣教師団の飲酒撲滅運動に関しては、Judd IV、pp.79-82参照。
- 48) ハワイ宣教師団の古参メンバーAmos Starr Cookeであろう。日本側記録には登場しない。
- 49) ダイヤモンド氏については、未詳。‘bro.’ [brother]の称号が付いていることからハワイ宣教師団のメンバーであったことは分かる。日本側記録には登場しない。
- 50) 宣教師で医師でもあったジャッド博士Dr. Gerrit Parmele Judd (1803-1873)。後には、請われてハワイ王国政府で要職を歴任するに至った。『蕃談』では「ミス、テ、カオカ」、『時規物語』では「タラカ」。「カウカ」Kaukaとはハワイ語で「医者」の意味。「此タオカはアメリカより罷越居、土着(じく)人へ何か教導いたし、また医療なども教へ候。此者宅の棚の上に髑髏(しゃれこうべ)有之候」(『時規物語』、75頁)。「ミステカオカの蔵する日本図は詳細にして一度を方六寸に描けり。浦賀港の曲折海の浅深も分明也。蕃人又能港口に羅置せる石数をも諳ず。曰く此狭間は僅に若干里にして両山対峙す。山上に砲炮有て挟撃せんと謀る。故に戒て船を進めず。客[次郎吉]曰く日本の周囲は到处砲台櫛比し、防守厳にして犯し難し。独り浦賀ならずと。カオカ揺首して曰く、汝妄言を吐く勿れ。吾は業已に子細に稔知せり」(『蕃談』、294頁)。
- 51) ハワイ宣教師団の中心人物であったハイラム・ビンガム師Rev. Hiram Bingham (1789-1869)。『蕃談』では「ミス、テ、ベイナン」、『時規物語』では「ベイネム」。「此ベイネムは太三郎等ワホ[オアフ島]へ着より貳十三年前にアメリカより当地へ渡り、宗門を弘め申に付、先(まず)所の者へ手跡を教へ申し候。エギリスは文字貳拾七字にて通用いたし候へ共、十四字にて通用の工夫いたしをしへ候。いづれも次第に信服し、当時にては親の如く尊信いたし候。娘は当所出生にて十七八歳に罷成候。此頃召連一先アメリカへ戻り嫁し付せ、其身は重て当所へ罷越可申由、往来一年計掛り候様子、同人年は六十貳三に見え申候。右の出帆に付当所近辺嶋々の者迄も、土産物品々持参いたし夥しく船へ送り、男女共群り立て涙を流し別を惜み申候。やがて乗出候へば船より送り候者へ「ホーロー・ホーロー」[“Hello, Hello!”]と呼、陸の者共笠をぬぎ同様に呼合申候。是は出船の折に申言葉の由に候。此後少し日数相立太三郎等[カムチャツカに向け]出帆いたし候」(『時規物語』、53-54頁)。「法使「ミス、テ、ベイナン」は齡五十五六にして、其廿四五歳のときより島に来て衆を化導し、留住廿余年也と。当初はカナカ(割注：土人)等帰依せず。往々刃を挟て之を傷せんと謀る。法使百方勸導して今は全島其教を仰ぐに至る。客[次郎吉]在島中法使島を去て米利堅に還れり。舶方(まさ)に港を發せんとす、鬮島のカナカ別を惜み数万人岸上に圍擁して西風の祖道の砲を連発し声を放て働哭す。砲声哭声天を撼ず。帆影の尚見べき間は咸両手を展じ「マオイ、マオイ、アロハ、アロハ」と叫べり。是は平安を祝する語にして自愛せよと云ふが如し」(『蕃談』、265頁)。なお、ビンガム師の年齢は、正しくは、この年、満50歳である。
- 52) ボールドウィンは、平四郎や次郎吉たちと日本の数の数え方を巡って問答を交わしたことがある。その模様は、『蕃談』に次のように記されている：「米利堅人曾て本邦の数目を問ふ。漂人[次郎吉]百千万億を答ふ。夷人咲て日本は数目寡し、我邦は如此と、無量の大数を挙ぐ。船長平四郎は較内典[仏教書]に通ぜしか、我邦に十万億土の仏那由他恒河沙等の目有と告ぐ。夷人胡盧して「スツペキイギリス」と云へり。即ち饒舌漢子の義なり」(292頁)。「スツペキイギリス」は“Speak English!”であろう。なお、ボールドウィンは、1840年10月17日付の『ポリネシアン』紙で、まるまる1面を使って日本人の数の概念を紹介しているという(プラマー、154頁)。
- 53) 「親司 越中射水郡長徳寺村京屋八左衛門 同[天保九戊戌歳]四拾七歳 天保十四年癸卯五月帰国 嘉永元年戊申三月五日江戸表にて病死」「岡使 又 知工共云 越中新川郡東岩瀬田地方鍛冶屋太三郎 同三拾七歳 幼名長次郎 天保十四年癸卯五月帰国 嘉永二年己酉五月九日病死」「追廻 越中射水郡放生津古新町土合屋六兵衛 同三拾壹歳 幼名六三郎 天保十四年癸卯五月帰国」「同[追回] 越中射水郡放生津新町片口屋八左衛門弟 七左衛門 同 貳拾三歳 天保十四年癸卯五月帰国」(『時規物語』、13-14頁)。
- 54) 「扱三人共十四五日ミヒナレ[ボールドウィン]の方に逗留いたし候。此処にて太三郎等いづれも「ワホ」[オアフ島]へつき、一集に罷在候由承り候ゆゑ、早く「ワホ」へ参り度旨、ミヒナレへ頼み候。同所へ商方の「シロポ」(割注：一本櫓の船をいふ)の便船有之候て、送られ候故、「ワホ」へ着いたし候」(『時規物語』、41-44頁)。チェンバレンの日記から3人がマウイ島からオアフ島まで乗った船の名前が分かる。
- 55) 先着していた4人は、広東人パピユの許に寄宿していた。
- 56) ハワイ宣教師団の一員であるRev. Benjamin W. Parkerであろう。日本側記録には登場しない。
- 57) ホノルル到着後の3人の宿に関し、『蕃談』には次のようにある：「ワホー[オアフ島]の法使[ビンガム]は「ミス、テ、ベイナン」と称す。次官[ジャッド]は「ミス、テ、カオカ」と呼ばれて医人也。上岸の後、

「バラオイン」〔ボールドウィン〕の転書にて、客〔次郎吉〕等身辺の諸具を車に装し、カオカの家に僑寓す。法使の居と対面也(244頁)。「私共三人はミステカラ〔ミスター・カオカ〕と申医者の方に罷在、太三郎等四人はカント仁〔広東人〕の宅に罷在申候」(「漂流人次郎吉物語」、230頁)。3人が入居した建物に関し、日本側の記録は一貫してジャッドの家と記している。ジャッドの家の敷地内にパーカーが建てた建物に3人は住んだということであろうか。なお、ジャッドの家に関しては、次のようにある：「1835年春、彼ら〔ジャッド一家〕はハワイ到着以来ビンガム一家と一緒に住んでいた宣教館を出て、通りを挟んだ向かい側にある家に移った。この家には、以前は宣教会の印刷業者であるスティーヴン・シェパードStephen Shepardが住んでいた」(Judd IV, p.73)。

- 58) 未詳。日本側の記録に出てこない。
- 59) 『時規物語』は、平四郎は「よわみ(虚勞)」を患っていたといい(45頁)、次郎吉が書いた墓碑には平四郎は「長々病気に付き」とある。オアフ島到着以来、平四郎はジャッド博士の診療を受けていたというから、その頃から体調を崩していたのであろう。
- 60) 平四郎は共同墓地に埋葬された。
- 61) 「前段平四郎病気はよわみ(虚勞)にて、漸く疲勞増候ゆゑ、ミヒナレ〔宣教師〕のタオカと申者〔ジャッド博士〕は医術も心得候ゆゑ、療治を頼み薬も飲せ候へ共、遂に十月下旬病死いたし候。其趣あるじベイネム〔ビンガム師〕へ届候処、其日の内に「ケン」〔King. ハワイ国王カメハメハ3世。1814-1854〕并「ケン」同様の者壹人外に下役躰の者壹人罷越見分いたし候」(『時規物語』、45頁)。「船頭平四郎儀亥年九月十日頃と思敷時分、サントイチにて相煩候処、陣屋の御典薬の様成医者〔ジャッド〕被附添居、念頃に療治有之候得共、不相叶病死仕候処、陣屋の役人中も其所へ被罷越、被見受候て落涙被致候」(『時規物語』所載の口書き、228頁)。
- 62) 「翌日上広く下の方せまき棺を持来り、死人に新敷筒袖の着物をきせ枕をいたさせ候て(枕は革にてこしらへ、中に岩に生ひ候けけを入れ、平めにしたるを用ひ申候。ひきく候へば二つ又三つも重ね申候)、棺に斂め蓋を釘にて打付、白木綿の大風呂敷様成ものを懸け、車に載せ夫に繩を付候て、参詣の者までも皆挽申候(割注：平四郎彼地の宗門に入不申に付、寺へは入れ不申よしに候)。寺の傍に有之候野原へ挽参り、ベイネム〔ビンガム〕何やらん経の様なるものを誦申候。初め宅にても棺の前にて右の通り誦申事有之候。扱ほり置候孔へ棺に繩をつけおろし候へば、ところ(土着)の者共も参詣いたし、手ごとに土ひとすくひ穴へ入れ、やがて鋤にて全く埋め候て、皆々帰り申候」(『時規物語』、45頁)。「扱葬方は打臥候形チの箱を拵、寝姿の儘にて右箱へ入れ、山へ土葬に仕、僧分の由に候得共、彼地常人の如き者〔ビンガム〕参り、誦経鉢いたし、厚相葬、塔婆様の物を立申候。文字横文字にて分り不申候。私共は折角念仏を相唱葬遣申候」(『時規物語』所載の口書き、228頁)。「[ハワイに到着してから]三十余日にして平四郎病に罹り物故す。乃ちペイン〔ビンガム〕の周旋にて葬儀を治む。先木棺に斂め、車に載し、絨布を覆ひ、木綿の巨索を附く。ペインは厚さ三寸余なる大冊の経典を手にし前に立つ。僧徒後に跟随す。客〔次郎吉〕等及び会葬の徒は又其後に従ふ。索は土人之を輓く。兆域には深さ七八尺に坎を掘す。柩下る。法使経文を洛誦する一時半余を費す。

於して、各人斂にて土を抄(すく)ひ掩ふ。三百余名の衆なれば後には土も剰余して、唯様(かたち)を為すのみ。乃ち厚板を樹て、墓表とす。板面は白色に塗り、上鋭にして蓋あり。高四尺濶一尺余。又黒色の瀝青様の物にて、漂来病殞の梗概を右文に誌せと命ず。同火〔仲間たち〕皆無丁(むひつ)にして窮す。幸に客〔次郎吉〕邦文の片仮名を諳ず。故に命に應ぜり。書了す。法使之を蕃文に改め、冊子に登記し、曰く後來日本人来らば端委を告るに証す。又曰く尋て米利堅よりストーン石を取り、式に依て改造すと。法使本年内其三子を連喪し佳石の三碣表旁に駢列せり。広商〔広東商人パピユ〕も葬に会せしが〔碑面に書かれた〕大日本の三字は読べし。自他は解し難し、意ふに日本文ならんと。又四五日過て法使の分付とて、墓を環して四出紅繡の草花を栽し、其外には柵欄を方八尺高三尺余に結て之を護す」(『蕃談』、244頁)。「サントイチ逗留中船頭平四郎病死して其処に葬る。土人懇切なる事限りなし。葬に会したるもの老若男女凡そ三百人ばかり也。いづれも発声して啼泣す。葬の様子は仏経か何角唱る者〔ビンガム〕、前に行き皆々夫々従ひ行く。葬地に至り三百人ばかりの者銘々に斂を執て土を棺上に掛るなり。棺は十分丁寧にすれば、石にて臥棺と為し、頭脳手足を夫々納る様に致しあるなり。平四郎を葬るは事急にて木棺なり。其製作は前に云ふ如し。既に葬て墓碣の石は何れマレカイ〔アメリカ〕より取寄、立派に致す也。今は此木にて済すべしとて、表木の如きものに平四郎の本国実名等委細書付く。書付は次郎吉認たり」(『蕃談』所載の次郎吉の証言、301頁)。「サントイチの内ウハホ〔オアフ〕と申処にて十月頃、船頭平四郎相煩候に付、ミステカラカ〔ジャッド博士〕と申医者の方に逗留仕、療治仕候得共、不宜、御陣屋の御典薬〔ジャッド博士〕毎日御出被成候へ共、不相叶、三十日斗相煩候て病死致し候処、サントイチの御大将ケンチヤラヂャレ様〔カメハメハ3世。本名カウイケアオウリKauikeaouli〕、院家ミステバン様〔ビンガム師〕御出、其外近付の者も相身得、落涙被致し候、院家様も都而(すべて)髪はシャボシャボ、衣も着不申、牡丹〔鈕〕メの着物にて上に風呂敷様の金欄躰のもの着仕申候、夫より死骸寝姿程の箱様の物へ入、山へ出葬に仕、最初山へ穴掘に遣置、右箱を男女五百人斗出、落涙致し、行列にて引、山へ行き、院家は前段の装束にて山にて誦経致し、身付きものより土を懸させ、土葬の上に横文字にて相分り不申、塔婆様のもの相立、私共念頃に念仏を唱へ、葬申候、土葬に仕候節、院家イイホハイ、ウタヲハニモレリ雨ニ〔アーメン?〕と申て、穴へ入申候、私共にも塔婆様の板相渡、文字書可申旨申候に付、大日本国越中国富山木町浦船主平四郎南無阿弥陀仏と書申候」(「漂流人次郎吉物語」、229-230頁)。なお、文中に平四郎は「三十日斗相煩候て」とあるが、彼は11月1日にオアフ島に到着して5日に死亡したのであるから、30日というのは誇張である。

- 63) 平四郎に3人の息子と2人の娘がいたことは、日本側記録には記されていない。
- 64) 平四郎の死から5日め、ジャッド博士の長男ゲリットII世Gerrit Jr. Juddが虫垂炎を起こし、13日に死去した。葬儀は15日に行われ、彼の遺体はカワイアハオKawaihahao墓地に埋葬された。ビンガム師が司式を務めた(Judd IV, pp.94-95)。平四郎の遺体も同墓地に埋葬されたのであろう。
- 65) 「天保十一年庚子(割注：彼千八百四十年)正月間、



客〔次郎吉〕等再びマオイ島に到りバラオイン〔ボールドウィン〕の寺にも遊べり」（『蕃談』、245頁）。

- 66) 「太郎等六人パピユの方に三四十日計集り居候処、喰物着類等あてがひ候て遊ばせ置候。亥十二月パピユ方に居候甥の様子にてジョンと申者并広東人共、ムマライ（マウイ島）と申嶋へ沙糖しめに参り候に付、八左衛門、六兵衛、七左衛門、次郎吉四人を手伝に連行申候。〔中略〕此処〔マウイ島のワイロク〕に大かた三箇月程罷在、沙糖のしめがらを入置小屋作りなど手伝いたし候」（『時規物語』、47頁）。『蕃談』の記事を併せると、この時のマウイ島滞在は、以下のようであったらしい。次郎吉、八左衛門、六兵衛、七左衛門の4人は、止宿していた広東人商人パピユの甥のジョンからマオイ島にジョンが所有しているサトウキビ畑に砂糖を絞りに行くので手伝いを頼まれ、天保十年の十二月頃、マオイ島に渡った。サトウキビが熟すまでに一月ばかりあるというので、その間にマウイ島のラハイナにあるボールドウィンの家に遊びに行ったらしい。その後、ラハイナとは島の反対側にあるワイロクで数ヶ月サトウキビ絞りに従事したが、ここにいたのではホノルルに中国行き軍艦が入港しても分らないと現地人に言われ、6月頃、山越えしてラハイナに向かった。途中でジョンに会い、引き留められたがこれを振り切り、ボールドウィンの家に辿り着いた。その後、次郎吉は八左衛門と一緒にボールドウィンの屋敷にしばらく滞在したようである。その後、ボールドウィン宅に一人で残り、ラナイ島に行ったこともあった。
- 67) 八左衛門であったことが、以下のエピソードから分かる：「ムマライのミヒナレ〔ボールドウィン〕方普請いたし候節、八左衛門、次郎吉同人方に罷在候て、山より石を朝夕持運び申候処、暑さ強く候に付、次郎吉木の枝にて日本風の笠を拵え、是を着盆躍りいたし候へば（割注：是は忠臣蔵羅生門など申歌を唄申候）子供など多く集り候ゆゑ、此子供に石を所々より取り寄せさせ、夫を兩人にてミヒナレ方へ持運び候ゆゑ、余人よりは働きよろしき方に候」（『時規物語』、76頁）。なお、普請前のボールドウィンの家が仮家だったことは、「漂流人次郎吉物語」に「其寺仮小屋にて、十間に式拾間斗有之」（228-229頁）とあることから分かる。次郎吉らが普請を手伝ったボールドウィンの新居についてはAlexander, pp.120-145ならびに同書に収録された画（図5）を参照のこと。
- 68) 「〔ワイロクからラハイナに戻ってきた時、〕広東人〔ジョン〕方へ参り候ては指置申間敷と存、直に此処のミヒナレ〔ボールドウィン〕方へ参り申候。此に暫罷在候様申候候に付、七八日も逗留いたし、「ワホ」〔オアフ島〕へ帰り度旨ミヒナレへ頼み申候処承り届小船にて「ワホ」へかへし申し候。其節次郎吉壹人は此処に居留り、廿日計おくれ「ワホ」へ罷越、五人の者と一集に相成申候」（『時規物語』、49頁）。
- 69) 「イコ」Ikoの意味不明。
- 70) これは、いささか簡略化された表現である。長者丸は新潟港から北上し、松前で荷を降ろした後、箱館から江戸に向かう途中、仙台領唐丹港を出港した直後に遭難した。
- 71) この事実は日本側記録には出てこない。
- 72) 長者丸が遭難したのは天保九年十一月二十三日。
- 73) 天保十年一月二十四五日頃、「炊」の五三郎、渴死。四月十二日頃、「片表」の善右衛門、病死。四月十五日頃、「表」の金六、自殺。



図5 ラハイナのボールドウィン邸（新居。次郎吉らが建設を手伝ったのは、おそらくこの屋敷と思われる（アレクサンダーの書より）

- 74) 「朝鮮」、あるいは朝鮮との交易を行っていた対馬のことではなからうか。あるいは、中国の寧波の沖合の「舟山」のことかもしれない。
- 75) ここでも酒に対する関心が示されているのは、ハワイの宣教師団が飲酒撲滅運動に取り組んでいたからであろう。
- 76) 釈迦、阿弥陀、観音などを指すものか。
- 77) 生き残った6人のうち、八左衛門の家族は不明。太郎には妻きの、倅多四郎、娘みな、多四郎の妻すい、孫の豊松がいた。また、太郎漂流後に孫松次郎が生まれたという（高瀬、170-171頁）。太郎は嘉永二年己酉五月九日に郷里の東岩瀬村で肺患のため死亡した。六兵衛は妻があった。六兵衛は妻との間に女兒はるをもうけ、はるは夫との間に土合要造氏（昭和四十二年当時六十一歳）をもうけたという（高瀬、84頁）。六兵衛は、安政四（1857）年十二月十九日に死去したらしい（同）。七左衛門には兄（片口屋）八左衛門がいた。八左衛門は、松前で下船したため、遭難を免れた。七左衛門の他の家族に関しては不明。金蔵は、帰国後一代限りの塩の小売人となることが認められたという。富山の新湊に孫娘がいたことが報告されているから（高瀬、90頁）、帰国後、所帯をもったものと思われる。次郎吉は、帰国後の記録から、東岩瀬米田屋故七郎右衛門の五男で、妻を持ったこともあったが離縁し、水主稼業の合間には兄七郎右衛門の厄介になっていたことが明らかにされた。村の「肝煎」から提出された文書には「妻子も無御座、壱人り身の者にて」と記されている（高瀬、166頁）。
- 78) この人物については未詳。
- 79) 1840年8月3日、イギリスの貨物船ハーレクイン号でホノルル出港（プラマー、166頁）。「此後〔ビンガム師がアメリカ本土に向けて出発してから〕少し日数相立太郎等出帆いたし候。その船は貳本櫓の貳千石積位にて鉄炮貳三挺有之候。船頭の名はセンとか申候。また以前船頭いたし罷在候カーダ〔カーター〕と申者も妻を召連れ商ひ方にて同船いたし候。総人数貳拾壹人外に太郎等六人乗組、売物は塩、麦の粉、沙糖、木綿類、沓様の物品々積込有之候」（『時規物語』、54頁）。「三年目七月頃と覚敷時分迄、右サントイチに私共等罷在候処、イギリスの商船の由にて貳千石計の大船サントイチへ商に罷越候処、陣屋より頼有之由にて、イギリス船に私共等を為乗、七月下旬サントイチ出帆仕、八九月の頃ヲロシヤへ渡シ申候」（『時規物語』所載の口書き、228頁）。「第七月に至て米利堅商人「キ

ヤップン・カータ」の周旋にて、英商「キャップン・セン」の船に載し、カムチャツカに赴く。カータは島に舗店を有す。斯行は「ミス、テ、ターベタ」と自己の集貨糖麩等を装し、妻孥を伴ひ、親ら乗す。婦は醜陋なり」（『蕃談』、246頁）。「キャップンセン」は豪悍なる人にして、鬚髯多く、善飲す。齡は廿四五也」（『蕃談』、246頁）。「ハホ〔オアフ島〕にて私共を大唐へ送りがたく、ヲロシヤへ送ると申て、子〔天保十一年＝1840年〕の七月頃、サントイチに三年私共罷在候処〔実際には、一行のハワイ滞在は11ヶ月〕、イギリスの商船の由にて、忒千石斗積大船サントイチへ罷越候処、御陣屋より頼有之由にて、イギリス船に私共を乗せ、七月下旬ころサントイチ出帆、九月頃ヲロシヤへ送り渡し申候」（『漂流人次郎吉物語』、231頁）。

- 80) この後、カムチャツカ、オホーツク、シトカを経て天保十四（1843）年五月に択捉島の振別（ふるべつ）場

所に帰還。

- 81) 『蕃談』の写本。次郎吉の談話を古賀謹一郎がまとめた漂流記の写本で、いうまでもなく、次郎吉の自筆ではない。ホノルルの宣教会図書室が入手した写本とは、現在、ホノルルのビショップ博物館に所蔵されている写本のことではなかろうか。後者は、1914年に東京在住の某アメリカ人が入手し、ハワイ州知事ジョージ・R・カーターに譲り、その後、子息のG・ロバート・カーターから同博物館に寄贈されたという。ジョージ・R・カーターは、J・O・カーター船長（次郎吉たちと同じハーレークイン号でカムチャツカに商売に行った人物）の孫にあたり、G・P・ジャッド博士とも縁続きにあたるという（プラマー、154頁）。
- 82) 「船長ケスカの再生大息憫忱盛意、生々感謝すと客〔次郎吉〕云へり」（『蕃談』、243頁）。

（2008年9月27日受理）